

新潟大学教育人間科学部附属養護学校
 進んでやろうとする力と、やさしく思い
 やりのある心と、元気で丈夫な体を育み、
 自立につながる力を養う。



湯浅 優 副校長

「体験」を大切に

附属養護学校では、障害のある子どもが自立して社会参加できる力を育てることを目的としています。その手段として我々が大事にしているのが、「体験する」ということです。例えばお金の勉強をするにしても、普通ならおもちゃのお金を使いますが、ここでは本物のお金を使います。実際にコンビニで買い物をするといった本物の体験をさせる。このように外へ出て行くことで、障害者の存在やニーズを知ってもらうこともできると考えています。

遊びを使った学習

自分から人やものに働きかけるというのが、すべての学ぶ基本だと思います。そういう力を小さいときから育てていくために、ここでは「遊び」を教育課程の中に取り入れています。例えば小学部では紙遊びや水遊びなどを行っています。この「遊び学習」が自分から活動しようという意欲を育てるのに役立っています。それぞれの子どもたちの発達段階に応じて遊びを構成しています。

「遊び学習」の発展延長上に「生活単元学習」があります。これは、自分たちの身のまわりから課題を見つけて、自分たちの力でそれを解決していくという一連の活動です。最近ですと、小学部の生徒たちが新幹線で長岡まで行きました。もちろん学校のバスを使えばすぐ目的地まで到着できます。しかしここでは移動という結果ではなく、移動することそのものを重視しているのです。公共の交通機関の使い方や切符の買い方、乗車マナーなどを総合的に学ぶにはいい機会なんです。

余暇と家事を学校で学習するわけ

高等部の生活学習では、主に余暇や家事に関わることを学習しています。なぜ余暇に関わるのが大事かという、卒業後の生活のことを考えてのことなんです。卒業後は就職するわけですが、離職の一番の要因は人との関わりでトラブルを抱えるか、あるいはストレスを発散できずに仕事がうまくいかなくなるためです。したがって余暇活動をストレス発散やエネルギーの充足のために上手く使うことを学習していく必要があります。

家事についてですが、皆さん小さい時にリンゴの皮むきを初めてやった経験などがあると思いますが、ここの子どもたちは絶対的にそういった経験が少ないんですね。やはり安全を考えて家庭でさせないでしょうが、実際に卒業して家から離れて住んだときに自分で簡単な調理くらいはできるようにさせたい。このように実際に社会に出てからすぐ必要となる力をつけることを社会生活学習ではねらっています。

卒業生のケア

アフターケアは附属養護学校で非常に大切にしていることです。卒業生が今までに250人くらいいるんですが、その一人ひとりの消息や就業状況を把握するために、毎年春に「卒業生を囲む会」をしています。会に参加できる・できないに関わらず、案内のはがきに現況を知らせてもらうようにして、担当がデータを管理しています。会では高等部の生徒も参加して交流を深めています。

また就職している卒業生については、必ず職員や保護者の会の方が年に一度は職場を訪問して、本人の様子を見たり担当者と面談したりして情報をつかむようにしてい



花壇を待つ共生の場

ます。仕事上での悩みとか、リストラに遭ってどうしようとか、そういう相談にも丁寧に対応しています。我々のできる範囲で子どもたちの支援をしていきたいと思っています。

施設作業所を訪問すると、ずいぶん前に卒業した方でも附属出身だという連帯感のようなものを卒業生同士が持っていますし、我々に対しても「母校の先生」といった感情を持ってきていますね。

新大学生とも連携

私どもの学校が新大の附属ということで、教育人間科学部の学生さんを中心に常時ボランティアとして来ていただいています。現在社会人が3名、学生が23名ですかね。

うちの場合、ほかの養護学校に比べて慢性的に人が足りないと思っています。ですからサポートしていただくと大変ありがたい。学生さんも「障害児教育に関わっていききたい」という強い思いを持っていて、それでぜひボランティアを通して勉強したいという方が非常に多いです。また、卒論や修論の関係でさらに深めたいからと来ていただいている方もいるようです。

工学部の福祉人間工学科とも協働してい

ます。「vocca」というものがありまして、その機械を押すとメッセージが出るようになってるんですよ。例えば言葉がうまく言えないおさんがポンと押すと「トイレに行きたい」とメッセージが出たり、何かに答える場合○×の代わりにポンと押すと「はい」「いいえ」が表示されたり。それを工学部で開発しています。

養護学校だけでなく、いろいろなところと連携しながら子どもたちの豊かな生活づくりを進めていきたいですね。

附属小・中学校との交流

交流教育は互いの学校でメリットになるような形で交流していきたいと考えています。

つまり障害のある子にとっては、常に障害のある子たちだけと一緒にいては身に付かない社会性を付けるために。障害のない子にとっては、これからの共生社会に向けて、障害に対する理解とか、障害のある子が頑張っている姿を見て、自分の生き方について考えるとか、そういった意味で両方にとって意義のある活動だと思っています。

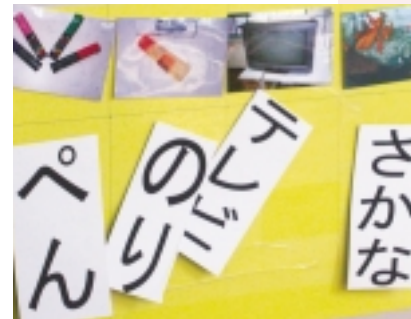
心まで耕せたら……

そこで今、3校共同で交流花壇を作ろうと計画しています。現在小学校の生徒が休み時間などに養護学校に来て、ここの遊具や敷地内で遊んだりしていますが、正直言ってまだお互いに触れ合うところまでいっていませんね。ですから、まず物理的に子どもたちが身近にいられるような状況を作ろうということで、花壇を設置することになったのです。花壇作りの作業を通して、心も耕していけたらいいなと思っています。

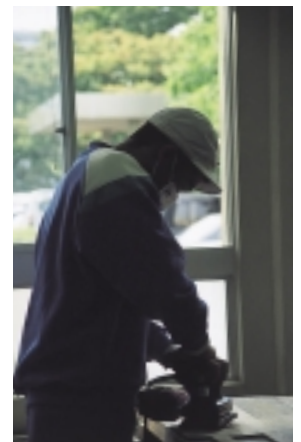
(聞き手：石坂妙子、川瀬知之、村越啓子、荒木理恵)



デジカメで作った写真つき名札。教室のいたる所に工夫がこらしてある。



写真と文字がセットになった学習ツール。自分の欲しいものを、写真や文字で訴える学習方法。



木工作業実習中。作業中は真剣そのもの。